

'15

後期日程

受験
番号

見
本

社会情報学部小論文問題

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題に落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
4. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
5. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。
6. 時間は120分です。

次の文章を読んで、以下の問に答えなさい。

グローバル化は均質化をもたらすとも言われますが、実際に進行するのは、選択可能性と多様性の増大です。どんな服を着てどんな音楽を聴くか、どんな宗教に帰依してどんな思想を信奉するかは、その人の選択しだいです。選択肢とその情報は、グローバルに提供されていて、どんどん多様になります。しかし、これが絶対の足場になる、これなら誰もが納得する、今年の流行はこれだ、というものはありません。どれも選択肢の一つにすぎないし、誰もが「自由」になって、誰もが選択するからです。

衛星放送やインターネットの普及がその原因だ、という説もあります。たしかに自室に居ながら世界中から情報を集められ、パソコンのクリック一つで選択ができるようになったことは、状況の変化を促進しました。

しかしルネサンスにおける火薬や印刷がそうであったように、技術はそれを使う側の世界観や社会基盤の変化があつてこそ、社会を変える要因になります。わからないことがおきたらインターネットのせいにする、雇用や家族が不安定になったらインターネット、犯罪がおきてもインターネット、デモがおきてもインターネットというのは、一面では当たっていたとしても、あまり実りのある議論ではありません。

近代的な経済学や政治学などは、主体の行動と選択の自由度が増せば、観測と情報収集にもとづいて合理的に行動できるようになり、世界は予測可能になって操作できるようになる、と考えてきました。合理的に選択行動する人が増えるなら、ホモ・エコノミクス⁽¹⁾に近い人が増えるわけですから、政策科学で社会を操作できる可能性も増すはずです。

ところが全然、そうっていない。なぜでしょうか。

それは近代科学が、主体は理性を行使するが、客体はたんなる物体だ、という考え方をしていたからです。

デカルトによれば、人間には理性があるが、動物は機械で、刺激に反応して動くだけです。えさを出せば食べる、それだけです。「えさを出してきたということは、こんなことを考えているな。だったら裏をかいてやろう」などということは、ないことになっています。政策科学で「**公定歩合**を下げれば投資が増える」というのも同じ発想にもとづいています。 著者の要請により、文中の「公定歩合」は「政策金利」とします。

しかし人間の社会では、こうはいきません。現象学^②の考え方からすれば、こちらが何かすれば、相手も影響を受けて変化します。そうなると、行為をする以前の情報や、それをもとに立てた予測は、役に立ちません。新しい情報を入手したとしても、情報を収集したという行為そのものが相手に影響するので、また変わってしまう。さらに相手が変わると、自分も影響をうけて変化するので、安定した予測や行動ができない。

もともとデカルトは、人間どうしが争うよりも、自然を征服して平和を築いたほうがいい、と考えていました。ですから、人間が自然を操作することは考えてはいても、人間が人間を操作することまで考えていたかは、わかりません。

現代の社会で増大しているのは、自由の増大というよりも、こういう「作り作られてくる」という度合です。ギデンス^③は、これを「再帰性の増大^④」とよびました。

自由というのは、何らかの足場がないと、たんなる不安定に転じます。デカルトが想定した「われ」は、神という不動のものに支えられていました。しかし現代では、「自己」もまた、「こんな自分でいいのか」と迷いながら選択し、意思決定し、「作る」ものになっています。アイデンティティの模索、自分探し、キャリアデザイン、ダイエットなどがそれにあたります。

しかし「自己」を作れば作るほど、作る主体であるはずの「自己」が変化して揺らぐのですから、無限の不安定がやってきます。自分を作りながら、自分を安定させようというのですから、はじめから矛盾した行為です。鏡に鏡を映しているようなもので、いつまでたってもやめられません。

一時的な達成、たとえば「体重が減った」としても、そこにグローバルな情報や選択肢、他者の視線が入ってくると、「もっとスタイルのいい人がいる」「変わってないと言われた」という不安定がやってきます。しかもこうした情報は、無数であるだけでなく、常に変化します。千変万化する無限の情報と視線にふりまわされ、不安定性はさらに増します。それに対応できなくなれば、摂食障害かうつ病がおこるでしょう。

不安になった人びとのなかには、よりかかれる絶対的なものを探す人もいます。新興宗教の人気、強いリーダーへの期待、格付会社へのニーズなどは、どこの国でも高まる傾向があります。しかしそれも、あつというまに選択にさらされ、非難され、使い捨てられていくことも少なくありません。

そもそもデカルトが考えたのは、自分だけが神の祝福である理性を行使して、世界を把握する人間でした。相手が予測された行動しかしないで、自分だけが安定的に理性を行使しているときにしか、こういう操作はできません。

「単純な近代化」が近代の初期にしか成りたないのは、このためでもあります。中央政府の官僚をはじめとした一部の人は理性を行使しているけれども、操作される側は慣習や伝統に従っていて、予測可能な行動しかしなかった時代にだけ、擬似的に成りたったのです。

しかしギデンズによれば、人間はほんらい再帰的な存在です。なんらかの対象との関係のなかで、作り作られてくる存在です。それはいまに始まったことではありません。

いわゆる「伝統的な社会」では、どうしていたのでしょうか。そこでは人間は、過去や伝統や神話を対照しながら、行ないを決めていました。神話にこう書いてある。前例がこうである。だからこの行ないは正しい。こうして人間は、過去との関係から、自分を作っていました。

しかし、過去は変化しない絶対的なものかといえば、そうではありません。現在の状態で記憶が変化する、というのはよくあります。仲が悪くなってみると、「そういえばあいつは昔から」というふうに、記憶が再編成されてきたりします。

同じように、集団的な過去や伝統もまた、現在の行為から作られてきます。尖閣諸島の歴史についての研究や知識普及が進んだのは、それが「問題化」してからです。聖書の解釈も、日本の古代神話の解釈も、そのときどきの政策や近代化のなかで変わりました。そうして解釈された神話は、人間の行動を作り、その行動のなかで、神話の再解釈が進みます。

歴史も創られます。日本でいえば、戦争の時代には「日本には武士道の伝統がある」という言い方がはやり、日本の輸出産業が好調だった1970年代には「日本は町人国家の伝統がある」という言い方がはやり、1960年代にコメの自給100パーセントが達成されるとともに終身雇用が広まると「日本は農民的集団主義の伝統がある」という言い方がはやりました。

武士も町人も農民も、江戸時代の日本にはいたのですから、好みの材料を拾ってきて「歴史」を創るのは簡単です。江戸時代には町人の花だった桜が「武士道の象徴」にさ

れたり、江戸湾岸の町民の地域料理だった寿司が「伝統的な日本食」になったり(冷蔵庫のない時代には内陸で寿司は食べていません)、めちゃくちゃな再編集もおこります。

自然科学もそうです。最近の日本では、テレビの動物番組で、「雄が子育てをする」というものが多い。メインの視聴者が、きっと子育て中のお母さんと子どもなのでしょう。一昔前は、そういう動物がいることは知られていても、「お父さんの育児参加」などは表現されなかったし、それをテーマにテレビ番組が作られたりはしませんでした。

そのときどきの時代の必要から、自然界の解釈が変化するというのは、資本主義の勃興期に、適者生存を唱えたダーウィン進化論が広まったことにもうかがえます。動物界が適者生存なのだから、人間界もそうあるべきだ、というわけです。

「伝統」もまた、固定的なものではなく、「現代」との再帰性のなかで、作り作られてくるものです。一定の範囲の人びとが、現在の行動を、ある過去の対象との再帰性のなかで決めていたときに、その対象を「伝統」とか「聖書」とよんでいたにすぎません。誰も読まなくなったら、それは「聖書」ではなくなるのです。

近代化の初期には、一部の知識人や官僚や政治家のほかは、「過去」や「伝統」を再帰性の対象とする行動様式から抜け出していないでいました。その時代には、政策も容易だったし、代表を選ぶのも容易でした。

グローバル化やポスト工業化で人びとが「自由」になり、選択可能性が増大すると、再帰性は飛躍的に増大します。不安定性は増し、人びとは「自由」になりながら未来の予測が立たず、他人を納得させられなくなっています。

「自由」は伝染します。こちらが伝統的な行動様式で相手に尽くしたのに、相手が「そんなことには縛られない。私は自由だ」と言い始めたら、自分も「自由」にふるまうようになります。

皮肉なことに、最初に「自由」の一撃を与えたのは、たいてい中央政府による近代化政策か、外国からの衝撃でした。「自由」の魅力と恐ろしさを知った人びとは、次々と「自由」になっていきます。

再帰性の増大は、誰にも不安定をもたらしますが、恵まれない人びとへの打撃のほうが大きくなります。かつての貧しい人びとは、共同体や家族の相互扶助で、経済的

貧しさをカバーしていました。あるいは、自分がつちかってきた仕事や技術や生き方への誇りで、心理的貧しさを補ったりしていました。

しかし再帰性が増大し、選択可能性と視線にさらされると、それらが揺らいでいきます。相互扶助も誇りも失って、無限の選択可能性のなかに放りだされ、情報収集能力と貨幣なしにはやっていけない状態に追いこまれていきます。

小熊英二『社会を変えるには』2012年 講談社
(設問の都合上、表記を変えた箇所がある)

注

- (1) **ホモ・エコノミクス**：経済人。自己の利益を最大限に追求するように合理的に行動する人間の類型をいう語。新古典派経済学の前提とされる。
- (2) **現象学**：ドイツの哲学者フッサールが提唱した考え方で、一切の先入見を排して意識に現れている現象を直観し、その本質を記述しようとする方法。
- (3) **ギデنز**(Giddens, A., 1938—)：イギリスの社会学者。
- (4) **再帰性の増大**：ギデنزは、みずからの行為に関する情報が、その行為について検討・評価し直すための材料として活用されることを「再帰性」と呼び、これが社会的な制度に仕組みとして及ぶことを近代社会の特徴としている。

問 1 下線部「過去は変化しない絶対的なものかといえば、そうではありません」とはどのようなことをさすのか。本文の例に即して、説明せよ。(400字程度)

問 2 本文中で著者は、人びとが「自由」になることは必ずしも望ましいことばかりではない、と述べていますが、これに対するあなた自身の考えを展開しなさい。(600字程度)